

先程、星野富弘（ほしの とみひろ/1946-）さんのスライドを見たのですが、彼は群馬県の倉賀野（くらがの）中学校の体育教師で、模範演技で生徒の前で宙返りをしました。ところが、失敗して首から落ちて、「ボキッ!」折れる音がはっきり聞こえたそうです。

この集會に、倉賀野中学校の卒業生がいて、彼の先輩は星野先生を知っているとっていました。私は群馬県に友人がたくさんいて、倉賀野中学校に案内して頂いた事があります。「この鉄棒です」と。星野さんが生まれ育った東村（あずまむら）に案内して頂いた事もあります。また東村村立、今は市町村合併でみどり市になっていますが、その「富弘美術館」に案内してもらった事もあります。富弘美術館は本当に田舎にあって。山の中の山の山の中。その美術館の前に大きな駐車場が広がっていて、全国から大型バスが乗り込んで来て、いつも超満員。

私も1度見た事があるのですが、不思議なのは、普通、人がたくさん集まると騒がしくなりますよね。ところがこの美術館、もちろん人の声はするけれど、そんなにうるさくない。というか、一人ひとり、彼の作品の前に立ったら沈黙するんです。ある人はメモを取り、ある人は黙想して、またある人は泣いている。彼の作品を通して誰かと会話しているみたい。そんな空間が富弘美術館。

ビデオコーナーがあって、富弘さんのインタビュー記事とか、お母さんの映像とかが出て来るのですが、その中で、忘れられないエピソードを聞きました。首の骨を折ったので、首から下の感覚が全部ない。だから、注射されても痛いとも感じない。尿のコントロールができないので、尿道にカテーテルという細い医療用チューブを通して、膀胱に溜まっているおしっこをいつも出すようにするのですが、カテーテルが細すぎて、よく詰ったそうです。おしっこの出口は、そのカテーテルしかない。それが詰まったら膀胱がパンパンに膨れ上がる。しかし、痛みが分からないんです。普通は尿意を催すけど、彼にはそれができない。それを放っておくと、痛みは感じないけど、身体は異常事態だという事を知らせてくれて、全身ドシャーっと汗が出る。それを放置すると、今度は心臓がバクバク、ものすごい動悸になる。それで、看護師さんに処置してもらって尿を出す。

ある時、またそういう状態になりました。ナースを呼ぶけど忙しいんですね。すぐに来てくれない。汗はダラダラ、心臓はバクバク。ナースは来ない。その時、突然お母さんが動いた。尿道に入っているカテーテル・尿が詰まっているチューブを、口にくわえて吸い出したんです。吸ったり吹いたり、吸ったり吹いたりしながら、カテーテルの詰りを取り除いて、尿がシャーっと出て行った瞬間、自分の心臓の鼓動が元に戻った。「ああ、母さんは命の恩人だ」とつくづく思った、と言うのです。

下手したら、口の中に尿が入って来るわけでしょ。「そんな事してくれるの、世の中で母さんくらいしかないんじゃないか。」息子が苦しみがいているのを見て、「早くナース来て下さい」と、指をくわえて待っているだけでは我慢できなくなって、気づいたら動いてしまっていた。「お母さんが命の恩人だ」というインタビュー記事でした。忘れる事ができません。

たくさんの作品がありますが、彼の詩には、一つ共通している事があると思います。それは、「制限される事によって気がつく祝福」。或いは、「何かを喪失する事によって得た・気づいた恵み」。私たちは、できるだけ多くのものを持つとうとするんじゃないですか？

お金・地位・健康・家、もっと大きく・もっと広く・もっと良いもの・もっとリッチに・もっとたくさん。だけど、制限されたり、何かを失ったりするのは不幸な事・ダメな事・崇られている事・マイナスイメージを持つ事が多いと思います。

星野さんの作品を読むと、制限されたり、何かを失う事によって、実は大切な事に気がついて行くという作品が多いと思うのです。3つほど紹介したいと思います。

1) 制限・動けない事によって、素晴らしいものを見る目が与えられた；彼の作品は花の絵が多いのですが、なぜ花の絵を描くようになったのか？口に絵筆をくわえるので、絵筆が届く範囲にスケッチブックを置かなければなりません。だから、顔から10センチくらいの所にスケッチブックを立てるのですが、そうすると壁になってしまう。スケッチブックによって視界が遮られてしまって、大きな物を見る事ができない。視界に入って来るのは小さな物。一輪の花・野の草を見て、描くようになりました。

「これは、自分にとって良かった」。動けないから、じっと見る事によって、花を正確にしっかりと見る事ができるようになった。花は、ただ見ているのと、絵に描こうと思って見るのとでは、見え方が全然違うそうです。絵に描こうと正確に見た時は、今まで気がつかなかったけど、花の中にも山や谷や林があって、おしべ・めしべ、大自然の凝縮形があって、すごい！

描く時は、画用紙のような真っ白な気持ちで向かわないと、花にそっぽを向かれる。皆さん、チューリップと言った瞬間、先の割れたスプーンを思い出しませんか？何となく、ひまわりはこんな花で、バラはあんな花で、チューリップはこうで…。見る前に、こういうものだという先入観がありますよね。

それで描くと、花がフンっとそっぽ向く。「ちゃんと見てよ」みたいな。先入観で描くと、本当に向き合った事にならないので、描くのは描いても奥行きのない作品になる。しっかり見ると、「こんな形をしていたんだ。無駄なものは何もなく、付け加えるものも、取り外すものも何もない。パーフェクトな作品なんだ」というのがよく分かる。

そして、ある時思ったそうです。「花を先入観で見ると花にそっぽ向かれるけど、俺は『アイツはこういう奴だから』と先入観で人を見る事が多いんじゃないか？」先入観で人を見ると、その人の良さが見えないうし、そっぽ向かれる事が多い。「花から教えられる事が多い」と言っておられました。

植物は、花もつぼみも葉っぱも、どれもこれも、明るい方を見るそうです。だから花を見ると「明るい方を・光の方を見ようよ」と誘われている気がする。もし忙しい義務教育の中学の体育教師をやっていたら、花をじっと見る事はなかっただろう。大切な事に気づく事はなかっただろう。動けないのは制限だが、大切な事に気づけたのは恵みだった。

2) 何かを無くす事によって、引き換えに何かを得ている；入院して最初の何十日間は寝たきりの状態だったので、枕で擦れて頭が床ずれして、後頭部の一部に10円ハゲができてしまいました。男性はよく笑いのネタにするけど、やっぱり気になるの。隣のベッドの人に「このハゲ、見られるんじゃないかな」とすごく気になるけど、手が動かない。毛が無くなって嫌だと思っていたけど、ある日、すごい能力を手に入れた事に気がついたんです。

首から下は、全然分からない。という事は、首から上は、身体中の全神経が集中しているみたいな感覚なんです。それで、いつも頭のどこかが痒い。でも「頭、搔いて」と言う時、「どの辺?」「上の方・下の方・もうちょっと右」とか言うけど、頭って、どこからが上ですか？どこからが下で、どこからが右でって、頭に境界線引っ張ってない。だから、ガーってムチャクチャされるわけ。ところが、10円ハゲができた事によって、「10円ハゲの斜め右2センチ。」ピンポイントで「ここか?」「あー、気持ちいい。」

頭のランドマークができた。毛が無くなったんじゃない。痒い所を捜し当てる印を得た。何かを無くすという事は、無くしたという事と引き換えに何かを得たという事なんだ。

皆さんも、そういう事がありますか？ 体力が無くなったんじゃないんです。休む能力が増えたんです。記憶力が無くなったんじゃないんですよ。忘却力が増加したのです。「私なんか、何の取り柄もないんです。何も分からないんです」と言う人には、強力な能力があります。何か？ 無能力。この無能力という能力は、人に教えるを乞う能力です。そして、大目に許される能力です。「しゃーないやん、あの人は」って。それに、出来る人よりも、大目にチャンスを頂ける能力ではないですか？ 無能力という能力。

あれも無くなった。これも無くなった。それも無くなった。ぜーんぶ無くなった。「無くなったのと引き換えに、実は良いものも与えられているのではありませんか？」そんな“気づきの詩”が多いと思います。

3) 自分が弱くなった分、お母さんが強くなった；何と言ってもお母さんの事。94歳ですか。すごい！

「私が倒れた分、お母さんが益々“おかあちゃん”になった。お母さんが、ただの百姓の女から、益々おかあちゃんになって行った。」“親は出来の悪い子ほどかわいい”と言いますが、愛はあり余る中よりも、何か制限を受けたり、無くしたりの中で、益々発揮される事が多いんじゃないかなと思うんですね。

『水戸黄門』は水戸光圀（みと みつくに/1628-1701）という実在の人物がモデルですが、本当には全国漫遊していません。助さん・格さん・風車の弥七とかいません。水戸光圀はものすごくお母さん思いの人で、自分の誕生日には、1年で一番質素な物を食べたそうです。普通は誕生パーティとかで、一番のご馳走を食べますよね。だけど水戸光圀は、「私が生まれた日は母が一番苦しんだ日だから、質素な物を食べたい。」

一番苦しんだ日、というのは出産の事でしょうか？ それもあるでしょう。しかし、事情があったんですね。水戸光圀のお母さんは、正式な側室ですらなかったんです。戦国の、或いは徳川の家には正妻・正室と側室がいますが、側室にもなれない、物の数にも入らない女の人たちがたくさんいました。お母さんは久子という名前で、まだ幼かったのですが、光圀のお父さんが手をつけたんです。彼女が身籠った事が分かった時、側室が機嫌を損ねた。「何で、あんなのに！」そこで、光圀のお父さんは久子に「この子を墮胎しなさい」と命令した。彼女は追いやられて姿を消し、隠れて産むんです。

当時、徳川家の（水戸は徳川藩ですよ）お殿様の命令に逆らったのが発覚したら処刑です。しかし、「私がこの子を守らなかつたら、誰が守るの？」と言って産むんです。つまり、自分の誕生は、久子の命と引き換えにもたらされた可能性があった。それで、「私が生まれた日は母が一番しんどかった日なんだから、この日が来る度に一番質素な物を食べよう」と言った、とされています。

不思議な事に、愛というのは、制限されたり、特に愛している者が困れば困るほど、益々掻き立てられるものですよね。そして、愛は相手と一体化するというか、誰かを愛するようになったら、愛する人の悩みが自分の悩みになり、愛する人の夢が自分の夢になり、その人の夢の実現が自分の夢の実現になるんじゃないですか？ お母さんの存在を通して、愛はそういうものなんだと具体的に教えられた。

だから、お母さんの詩がとても多いんですね。

しかしながら、お母さんの愛ですら解決できなかった大きな問題が、星野さんにはあったんです。彼は9年間入院していて、その間、大学時代の先輩がお見舞いに来たそうです。どうにもならない、現代医学では元に戻る事ができない病の人のお見舞いに行った時、皆さんならどんな言葉を掛けるでしょう？ 何と言って、励ます事ができるでしょうか？

彼は、「僕にできる事はこれしかありません。これ、読んで下さい!」と聖書を置いて行ったんです。聖書を開いてお説教したんじゃないかと、「あなた自身が読んで下さい」と。大学時代の先輩でもあるし、星野さんは聖書を読むのですが、妙に心にピンとひっかかった・心に留まった聖書箇所がありました。その箇所をお読みしましょう。（\*聖書は新改訳第3版）

**マタイ 11:28** **すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**

入院して9年間ずっと病院の中にと、体調は安定して来るので、考え事をする時間がどんどん増えるんですね。ふと気がつくと、「あれがなかったら、俺の人生は違っていた」と考えている。あれというのは、クラブ活動で生徒の前でやった模範演技の宙返り。

「あれをしなかったら、こんな事にはならなかった。いや、待てよ。そもそも体育教師にならなかったら、そんな事をする機会もなかった。いや、待てよ。体育教師になるために群馬大学教育学部に入ったけど、そもそも大学に受かってなかったら教師になってなかった。何で落ちなかったんだろう。いや、待てよ。器械体操を始めたのは高校時代だけど、始めなければ良かった。いや、待てよ。器械体操したいと思ったのは、自分の体が丈夫だったからだ。元々虚弱体質なら、こんな事にはならなかったんじゃないか。」

今の、惨めでどん底の状態をゴールとして考えた時、今までの人生が全部、この惨めな状態に行き着くためだったと思って、限りなくさかのぼって後悔ばかりしていた。ずーっとさかのぼると最終的にどこに行きつくか。「生まれて来なければ良かった。」「なぜ生まれて来たのか。母ちゃん、なんで、俺を産んだの?! 生まれて来なければ良かったよ!」

彼の心にあった重荷がこれなんです。ある所でこう仰ってるんですね。「人間にとって一番辛い事は、今が辛いというのではない。この辛い状態がずっと続くという不安・出口が見えない・この嫌な事が延々と死ぬまで続くと思ったら、生きる気力がなくなって、心がポキンと折れるんじゃないか。」

彼の場合、その苦しみは生きる事なのです。つまり、生きる事はお母さんに負担を掛ける。生きる、すなわち、お母さんに迷惑を掛ける。普通なら、私が稼いで、親孝行して養うくらいの事をしなければならぬのに、私は何の役に立つのか?貢献できるのか? 親孝行できるのか? 彼にとっては生きていく事自体が重荷で、心を疲れさせる事。しんどい事。

だから、「**すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。**」と書いてあるのを見た時、「ああ、私の事だ!」と分かったそうです。

と同時に、「何とも言えない懐かしい気持ちがした。」星野さんが高校2年の春に、家の裏に十字架の形のお墓が出来ました。白い十字架のお墓ですが、十字架の縦の所に文語訳（聖書の古い翻訳）で、『**すべて、疲れたる者、重荷を負うたる者は、我に来よ。**』と書いてある。

それを高校2年のどんな状況で見たかという、彼の家は農業で、堆肥と言って、重たい肥やしを山のように背負って登っていた時に、途中で見つけたのです。山のように重い堆肥を背負っている彼が、「すべて、重荷を負うたる者は、我に来よ」というので、自分の事かと思った。

だけど「我」とは誰の事なんだろう? 今重たいんだけど、誰か持ってくれるのか? 「我」の正体は何だ? その時は深く考えずに過ぎ去ってしまったのですが、大学の先輩がくれた聖書のこの箇所を読んだ時、「我とはイエス・キリストの事だったんだ。あれはキリストの言葉だったのか」と思ったそうです。

何か聖書がぐっと近くなったのをきっかけに、どんどん読み進めるようになりました。

そして、三浦綾子さんの本をたくさん読むんです。最初が『塩狩峠』。これは実話を基にした小説です。「連結器が外れて暴走し始めた列車を止めるために、クリスチャンの鉄道員が車輪の下に自分の体を挟んで止めた。そうして乗客を救った」という、本当にあった話を小説にしたのです。今まで彼は、「宗教というのは、弱い人がすぎるものだ」と思っていました。

「宗教は人に命を捨てさせるものではなく、命を捨てたくなっている弱い人たちがすぎるつかえ棒みたいなものだ。俺は健康で強いから、何だって努力で出来るんだと思っていた。神なんか信じるのは弱い者がする事だと軽蔑していた。しかし、見ず知らずの人たちの命を救うために、自分のたった1つしかない命を捨てる事ができるだろうか？ それは、弱い人間がする事だろうか？」

私が思っている宗教のイメージと、聖書のイエス・キリストは全然違うぞ。キリストは一体どんな方なんだろう？ 2000年前、私たちを救うために、十字架にかかって死んで下さった方だと書いてある。それが『塩狩峠』の主人公とオーバーラップして、何か語りかけて来るように思った。何で、こんなに生きるのが重くてしんどいかというと、生かして下さっている方を見失って、自分の頑張りで生きようとしているからではないか？」

これは、私も経験があるんです。私は7年前に、最初の妻を亡くしました。癌だったんです。看病が終わったというのと、今までの疲れが出たというのと、3人子供がいるのですが、3人共受験生という事もあって、ちょっと神経がへばってしまったというか、もう、放電し切った電池みたいな状態になってしまったんです。力が出ない。お風呂にも入れない。もう面倒くさい。「もういいよ…」物を落とす。拾わない。屈んで拾って、もう1度立ち上がるのが面倒くさい。「もういい…」。無気力。お客さんが来たら元気なところを見せるけど、帰ったら、無理して元気なところを見せた分だけ、「はぁ…疲れた、疲れた…」。二言目には「疲れた…」。「神様、私も早く天国に連れて行って下さいよ。」そんな感じ。

ある時、集会から帰って来て、ぱっと鏡を見ました。そしたらですね、髪の毛がボッサボサ。無精ひげがブワッ生えてる。しかも、もみあげの所が白い。そして、爪がめちゃくちゃ伸びてる。「えっ、この顔で集会行ったんか…」むさくるしかったやろな、皆さん。でも、自分の顔は見えないから分からなかった。

だけど、そのボッサボサ・無精ひげ・爪伸び放題の自分を見た時、心はどんだけ無気力になっても、心と無関係に、体の命の方は生きよう、生きようとしている。だから無精ひげ伸びる・髪の毛伸びる・爪も伸びる。すくすくと育つ。私が「頑張って生きて行こう!」と思った時だけ体が元気になるというのではなく、無気力状態になっても、私と別に、いのちというものが私を生かそう、生かそう、生きようとしている。その時改めて、「ああ、生きてるんじゃない。生かされてる…」。それをもっともっと濃厚な感覚で、星野さんは経験されたんじゃないかな、と私は推理するのです。

彼の詩で、「木の実が自分の重みで枝を下に下げながら、力抜きながら、全体重を枝に預けながら実っている。そこには何の気負いも頑張りもない。ただ枝に委ねて、枝から流れて来る養分を頂いて、甘い実を付けている。」そらんじて言えたらいいんですけど、そういう内容の詩。

「植物が幹や枝によって、また大地からのもので生かされているように、人間というのは、自分が頑張っているというよりも、大きな大きな存在によって生かされているんじゃないの？」

だから、神様が「あなたの人生、ここまで」と仰ったら、頑張ってもっと生きようとしても、生きる事はできないんです。私たちを生かして下さっている方がおられる。私たちを生かして下さっている方・お造りになった方、この大きな大きな存在が「わたしを愛して、わたしのところに戻って来なさい」と招いて下さっているんだと分かった時から、生きる事が重荷ではなく、嬉しくなるように変えられて行くのです。

**マタイ 11:28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**

教会が1つもない村で、高校2年生だった自分が聖書の言葉に出会えたのは不思議だなあ。もしかしたら、私が神様を全く知らない時から、神様は私がいずれ大きな試練に遭う事をご存知で、私のためにこの言葉を用意して、前もって聞かせて下さったんじゃないだろうか？よく考えると、私の人生、不思議な事がいっぱいあったな。なんで、あんないい人と出会い、あんな素晴らしい本と出会ったのか？私を生かそうとしている大きな意思がおられて、私を助けて下さっていたんじゃないか？

「私が空を見ているんじゃなくて、空が私を見ている」という詩がありました。「空」は神様を比喻として語っているんです。今までは大空を見て「空、青いなあ」。でも、こっちが見ているんじゃなくて、実は見守られていたんですよ。

見守って下さっている神様が、人としてこの世界に来て下さった方がイエス・キリストです。キリストは、私たちと神様が1つにアクセスするために、この世界に来て下さいました。

**すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。**

「その重荷が罪であれ、人生の虚無であれ、死の恐怖であれ、わたしが全てを負って解決しますよ。」という招きの言葉なんです。

スライドを通し、聖書のメッセージを通して、皆様がキリストの元に戻って下さるなら、これに勝る幸いはないと思っています。皆様の上に神様の祝福があります事を心から願っております。

~~~~~  
どうぞ、イエス様を信じて下さい。心からお勧めしたいと思います。

\* 動画は YouTube で「**HCA 東住吉キリスト集会**」検索。ぜひ見て下さい。

\* ラジオ番組「**聖書と福音**」(15分)も是非どうぞ。スマホでいつでも聞けます。YouTube もあります。

動画筆記：Rumi